

皇城御炎上の旨、扱々恐愕 さてきて

もうすじようもなく

無申条、殊二夜陰の由、嘸々 さぞさぞ

いかばかり あんじ

御混雑と如何計御案申

しかし けが ひとり

上候。併、軽俄の人は老人もなく

まずまずあんしんたてまつり

との事、先々 奉安心候。

(中略)

旨何も奉拝承候去五月には

大久保帰朝。木戸にも当七月の

はい

帰朝と存候。小生輩も当月

中にはマルセール出帆の心得に候。

おうけかたがたかくのごとくそつろう

先は 御請旁如此候也。

七月二日 具視

太政大臣殿

